芥川龍之介

ある日の暮れ方のことである。一人のが、の下でやみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかにもいない。ただ、ところどころりのげた、大きなに、きりぎりすがとまっている。が、にある以上は、この男のほかにも、やみをするやが、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかにはもいない。

なぜかというと、この二、三年、京都には、とかとか火事とかとかいう災いが続いて起こった。そこでのさびれ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、そのがついたり、金銀のがついたりした木を、に積み重ねて、のに売っていたということである。がその始末であるから、の修理などは、もとよりも捨ててみる者がなかった。

－17－